

# オリエンタリズムと地域研究

——エドワード・W・サイードの逝去に寄せて

## 白杵 陽

USUKI Akira

### 一 サイードと地域研究

二〇〇三年九月二五日、エドワード・サイード（コロ  
ンビア大学教授）が逝去した。享年六七歳。パレスチナ  
で生を受け、エジプト・カイロで育ち、研究者としては  
その生涯のほとんどをアメリカで過ごした。アメリカで  
は長い間パレスチナ人の民族的存在そのものが否定され  
てきた歴史があった。それだけにアラブ出身のパレスチ  
ナ人知識人としてその存在をかって闘った姿は壮烈なも  
のがあった。さらに、晩年の一〇年余は白血病という病  
魔との闘いの連続であった。病魔に苛まれるなかで最愛

の母親の死に遭遇し、自らの死を予感したかのように半  
生を描いた自伝を執筆しはじめ、『アウト・オブ・プレ  
イス』（邦訳は『遠い場所の記憶 自伝』みすず書房）  
（Said 1999）を出版した。その過程でパレスチナあるい  
はアラブ世界を再訪し、改めて自分の出自と来歴を問う  
ことになった。晩年のサイードの議論は鬼気迫るもので  
あったが、それは死と直面した人間がもつ迫力でもあつ  
た。

ところで、本論はコンラッドなどを研究する比較文学  
者としてのサイードを議論するのではない。また、フー  
コー的な言説論を武器とするポストコロニアルの批評家  
としてのサイードでもない。あるいはパレスチナの大義

を訴え続けたナシヨナリストとしてのサイドが遺した仕事を振り返ることも目的ではない。私自身、サイドの死に際してすでに小論を執筆したので(白杵 2003a)、ここではサイドにとつて地域研究がどのように位置づけられるかを考えてみたい。ところが、サイドと地域研究という問題設定はいささか居心地の悪さを感じる。というのも、サイドにとつて地域研究はオリエンタリズムの延長線上にあつて、留保された研究領域だったからである。否、サイドは時として全面否定と言つてもいい痛烈な批判を地域研究に投げかけているのである。

サイドと地域研究という問題設定をするとき、およそ一〇年前に刊行された矢野暢編『講座 現代の地域研究』(全四巻、弘文堂、一九九三―一九四年)を私個人としては思い出す。この講座の第一巻である『地域研究の手法』の巻頭論文「地域研究とは何か」を執筆したのは故矢野暢(京都大学東南アジア研究センター元所長)である。矢野はこの論文のキーワードをサイドの『オリエンタリズム』から引いてきているのである。そのキーワードとは「醜い新造語(ugly neologism)」というものである。つまり、サイドが「地域研究」を「醜い新造語」と言い放つたことを受けて、矢野は、なぜ地域研究という言葉が「醜い」のかという問いを投げかける。そして地域研究が「まだ学的尊厳と正統性をもたないわ

りには大きな顔をしている、というふうに受け止めておきたい。そう読み変えてみると、うなずける面がたしかにある」と、サイドの命名にはそれなりに根拠があるとして認めるのである。

サイドは『オリエンタリズム』のなかで系譜論的に、オリエンタリズムから地域研究へ、という図式を提示しているが、アメリカの学問的な制度における伝統ではたしかにそうであろう。しかし、これまでの日本における地域研究の独自の展開のありようを振り返ると事情がいささか異なると言える。もちろん、日本において地域研究者と自らを規定する者は、矢野の指摘を待つまでもなく、サイドの他者認識をめぐる鋭い指摘を自明の前提として新たな地域研究を立ち上げようと考えているはずだからである。

さらに、矢野は同じ論文でもう一つ重要な論点を『オリエンタリズム』から引用している。すなわち、地域研究は「学問的活動というよりは、植民地支配後の世界に誕生した、新興独立の、そしておおむね御しがたい国ぐににたいする国家政策の手段として了解されるべきであった」という一節である。地域研究は政策科学なのか、それとも純粹な世界認識の枠組みなのかという永劫帰的な煩悶がつきまとうことを認めて、サイドの批判を正面から受け止めている(矢野 1993: 4)。もちろん、矢

野としては、政策科学ではなく、地域研究は世界認識の枠組みとして再活性化しなければならないと考えているのであるが、地域研究そのものが第二次世界大戦中の戦争遂行のために生まれたという、その出自にどうしてもいかがわしさが漂っていることも間違いないのである。

矢野は『オリエンタリズム』を地域研究の立場から無視できない一石を投じた作品として位置づけて、オリエンタリズムを発明主義的思想で、ヨーロッパが創り上げた恣意的な他者認識の典型であると<sup>2)</sup>する。そして次のように述べる。「サイドの問題提起をまじめに受けとめたとしたら、そこに、ひとつの新しい研究領域がひらけることになる。それを「ポスト・オリエンタリズム」と呼ぶことにしよう。アジア世界とヨーロッパ世界とのあらたな関連づけ、ヨーロッパの視野の狭い近代的思惟様式の脱構築化、アジアの主体性の再定義などを要素とするはずの、この「ポスト・オリエンタリズム」は、いまの段階では、これを語ったとしても、まだ試論の域に留まらざるを得ない。それほど、サイドの描くオリエンタリズムの現実的看過は、大きいのである」と指摘した上で、地域研究の重要な柱と位置づける「世界単位」論を「ポスト・オリエンタリズム」という時代的要請と結びつくべき宿命にあると宣言する。すなわち、世界を区切る思想の抜本的印直し、自然の人間の共生関係の再認

識、権力的思考の反省、文明的視点に代えて、「地方」の視点の導入などを考え方の軸に据えながら、「世界単位」論は、「ポスト・オリエンタリズム」の要請にこたえるために、独自のポスト・モダンの姿勢を打ち出していくべき立場にある、と声明する（矢野 1994a: 9）。

矢野のサイド論を長々と紹介したのは、二一世紀を迎えた現状は、矢野が冷戦終焉直後に描いた、地域研究にとつてかなり楽観的な「ポスト・オリエンタリズム」的な状況からは遠くなりつつあると私自身が強く感じているからである。後ほど議論するが、私自身はサイド的な方向で展開されるはずであった「ポスト・オリエンタリズム」に対する反動の方が強くなりつつあると感じており、「ネオ・オリエンタリズム」とも呼ぶべき新たな潮流が現れつつあることをここで強調しておきたい。

## 二 オリエンタリズムと地域研究の連続性

言うまでもなく、サイドの代表的な著書『オリエンタリズム』は長い歴史をもつ中東イスラーム研究のあり方を批判しただけに中東地域研究あるいはイスラーム研究の方法論に与えた影響はプラスの面でもマイナスの面でも計り知れないものがある。そもそも、『オリエンタ

リズム』においてサイドが議論の対象としたのが、主に英仏のオリエンタリストによるアラブ地域の「代表」表象 (representation) に関わる問題であったからである。アメリカにおける地域研究が、先ほども指摘したとおり、サイドが痛烈に批判したオリエンタリズム、あるいはもつと学問的に制度化された「東洋学 (Oriental Studies)」や人類学の伝統に由来している事実を避けて通ることはできないのはもちろんである。オリエンタリズムを議論することは地域研究の起源を議論することになり、サイドの議論はナイーブな地域研究者にとつては非常に危険な両刃の剣を突きつけられるのである。その両刃とは、地域研究への批判的かつ建設的な新たな方向性を示唆するとともに、これまでアメリカにおける地域研究が積み重ねてきた知的蓄積のうち継承しなければならぬ良質な部分までも時として一刀両断してしまう破壊的な効果をもっているという両側面があるということの意味する。

サイドは『オリエンタリズム』刊行後、その鋭い舌鋒の矛先を「オリエント」から場を移して、アメリカのメディアではステレオタイプ化され歪曲されたイメージでもって提示されてきたイスラームをめぐる言説に設定して『カヴァリング・イスラーム』〔邦訳『イスラム報道』みすず書房〕(Said 1981) を上梓した。さらに、ア

メリカのメディアにおいて長い間沈黙を余儀なくされたパレスチナ人の声を自ら代弁する『パレスチナ問題』(Said 1979) をも出版し、アメリカ社会に衝撃を与える問題の書をたて続けに出版した。このような「三部作」というかたちで、それぞれオリエント、イスラーム、そしてパレスチナという、アメリカという戦場における三つの「最前線」において欧米の他者認識の問題性を根底から問うものであった。

もちろん、サイドが次のように指摘する問題は地域研究のみに関わる問題ではない。それは異文化理解という行為そのものに常につきまとう宿痾のような問題でもあるからである。すなわち、「(……) 習得された外国語は、その国民大衆への巧妙な攻撃の手段となり、またオリエントのような異質の領域を対象とする地域研究が、予測による管理のためのひとつのプログラムに組み込まれるのである。(改行) だが、こうしたプログラムはいつもリベラルな装いを保っていなければならず、これはふつう学者や篤志家、情熱家たちの手にゆだねられる。東洋人<sup>オリエント</sup>やイスラム教徒、アラブを研究することによって、「我々」は異民族とその生活様式・思考様式を理解することができるようになる、という考え方が喧伝されるのである」。

われわれ自身が自分たちのメガネを通して対象を見ざ

るを得ないという異文化理解に常につきまとう、永久に解決し得ない指摘のあとに有名なサイド一流の主張が展開されるのである。「この目的のために彼ら自身にみずからを語らせ、みずからを表象≡代表させるにこしたことはない（「彼らは、自分で自分を代表することができず、だれかに代表してもらわなければならない」というマルクスの、ルイ・ナポレオンに関する言葉（……）」が、たとえこの虚構に底流しているにしてもである）」と『オリエンタリズム』下：212-213。

ところで、アメリカにおける地域研究が第二次世界大戦中に戦略研究として出発したことはとりもなおさず地域研究が依然として残している政策志向的な尻尾を鋭く問うものであった。前述したようにサイドが具体的に批判を展開しているのはアメリカの中東やイスラームを研究するオリエンタリストであるので、繰り返しになるが、サイドにとつての地域研究とは中東地域研究とほぼ等しいと言っても差し支えないだろう。

サイドは『オリエンタリズム』の序説において、オリエンタリズムとは何か、あるいはオリエンタリストとは誰かという、一般の定義に関する議論を行っているが、その際、矢野が指摘しているように、すでに「オリエンタリズム」が「地域研究」に代替される図式を提示している。

「オリエンタリズムの複数の意味あいのうち、もっとも広く一般に認められているのは、学問に関するものである。事実、オリエンタリズムというレッテルは、あまたの研究機関のなかで依然として通用している。オリエンタリズムの特殊な、または一般的な側面について、教授したり、執筆したり、研究したりする人物は——その人物が人類学者、社会学者、歴史学者、または文献学者のいずれであっても——オリエンタリストなのである。そして、オリエンタリストのなす行為が、オリエンタリズムである。たしかに、昨今の専門家たちはオリエンタリズムという語よりも、オリエンタリズムとは地域研究という語のほうを好む。オリエンタリズムという語があまりにも曖昧で一般的にすぎるからであり、また十九世紀から二十世紀初頭に至るヨーロッパ植民地主義の横暴な執行者の姿勢を暗示しているからである」（『オリエンタリズム』上：19-20）。

サイドがその議論において、オリエンタリズムと地域研究の相関性を問題にするのはもちろん第三章「今日のオリエンタリズム」においてであり、とりわけ欧米における研究状況を念頭に置いて議論することがほとんどである。

「オリエンタリズムの一部門、ないしはオリエンタリズムの生活の一側面を研究する現代の専門家のことを、我々は「地

域研究」の専門的研究家とみなすことにすつかり慣れ親しんできた。そのため、第二次世界大戦あたりまで、オリエンタリストが（もちろん多くの専門知識を持ちながら、さらに）総括的陳述を行うための高度の技術をも備えた総合的研究家とみなされていた事情については、我々が生き生きとした感覚をもって理解することは不可能になってしまっている。ここで私が総括的陳述というのは、オリエンタリストが例えばアラビア語文法とかインドの宗教といった比較的複雑でない観念を定式化する場合、彼が同時にオリエント全体についての陳述をも行って、オリエントを総括しているのだと考えられていた（また自分自身そう思っていた）という意味である」（『オリエンタリズム』下：130）。

サイードが地域研究としての中東イスラーム研究を問題にする場合にアメリカの中東研究を代表する学会である北米中東学会（Middle East Association of North America：MESA）に言及することがしばしばある。『オリエンタリズム』のなかで批判的に言及されているのは、北米中東学会会長や北米中東学会において指導的役割を果たしてきた研究者である。とりわけ、一九五五年にハーバード大学中東研究センター長にイギリスから招聘されたハミルトン・ギブ、一九五七年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校近東研究センター長に招かれた

グスタフ・フォン・グルネバウム、ほぼ同時に後にシカゴ大学中東研究センターに発展することになる中東研究のポストに就いた政治学者レオナルド・バインダーといったアメリカにおける中東地域研究を推進してきた重鎮である。この点に関しては、アメリカ最初の中東研究の講座を設立したプリンストン大学との関係で後ほど少しだけ再度触れることにしたい。

サイードは、オリエントが自分自身でオリエントを再編成したり再定式化することができない以上、それを行うのはオリエンタリズムのもつ、今や伝統的となった能力なのだということを繰り返し強調してきた。ただ、サイードがオリエンタリズムのあとに来るものをどのようなと考えているのかがよく見えてこないことはしばしば批判の対象となってきた。もちろん、サイードもその欠陥を率直に認めている。

「結論として言えば、オリエンタリズムに代わる別の選択肢とは何なのだろうか。本書はただ何かに反対するばかりで、積極的に何かを主張する建設的な議論ではないのだろうか。私は本書のあちこちで、いわゆる地域研究における「脱植民地化」の新機軸——アヌワル・アブデル・マレクの業績、中東研究に関してハル・グループのメンバーが公刊した諸研究、ヨーロッパ・合衆国・近東のさまざまな学者たちによる革新的

な分析および提案——について語ってきたはずである。ただ私は、それらにざっと言及するか示唆するだけで、それ以上のことをしようとは試みなかった。私のプロジェクトはひとつの特殊な官僚体系を叙述することであつて、その体系を新しい体系に置き換えることではなかったからである」。

じつは、サイドが「脱植民地化」として高く評価するアブデル・マレクやハル・グループであつたタラー・アサド（アサドはイギリスのハル大学からアメリカのニューヨーク市立大学に移つたので、現在でもハル・グループが実体として存在するかは疑問であるが）は日本でも非常によく知られている人類学者である。アブデル・マレクの著作ははるか以前に邦訳されて（アブデル・マレク 1977a）、その著作のなかでサイドよりもはるか前にオリエンタリズムの問題性を指摘している。彼自身、頻繁に来日し立命館大学でも教鞭をとつたことがある。また、アサドの著作『宗教の系譜』（Asad 1993）は岩波書店からその翻訳が刊行された。アサドはそもそも人類学の植民地主義的性格を批判するアンソロジーを編集し、最近では「宗教学」というディシプリン自体の制度化が孕む問題を世俗的なものとの関連のなかで議論している（Asad 1973; 2003）。

日本における中東イスラーム研究はサイドと同時代

的に同じような課題と取り組んできた板垣雄三氏らの論客のおかげで早くから「オリエンタリズムの罫」にかからないように細心の注意を払つてきたという過去がある。サイドの言う「オリエンタリズムに代わる別の選択肢」が意図的に選択され、まさに中東イスラーム研究の主流となつていたと言える。というのも、戦後第一世代の日本の中東イスラーム研究者はヨーロッパに留学し、まさにヨーロッパのオリエンタリズムの真髄を受容、吸収するところから出発し、第二世代の板垣氏らがそのような流れとは一線を画す、ある意味での現場主義、あるいは臨地研究的なアプローチを始め、第三世代、第四世代がそれに続いたからである。

### 三 「ネオ・オリエンタリズム」と これからの地域研究

ところが、私自身が危惧しているのは、とりわけ冷戦終焉後——サイドの個人史のなかでは白血病との闘いの日々であつたが——欧米のみならず、サイドの言う偽善的な「リベラルな装い」すらもかなぐり捨てた、露骨なかたちで悪しき意味でのオリエンタリズムへの回帰が起こっていることである。すなわち、他者理解の根本に関わる「ネオ・オリエンタリズム」とも呼ぶべき論調

が日本で勢力を増している現状がある。とりわけ、このような傾向は九・一一事件以降顕著である。イスラームに「テロ」という烙印を一方的に押し、さらに「テロ」がマジックワードとして乱用されてインフレ現象を起こし、さらにオリエンタリズム批判的な「マツカーシズム」を生み出したサイドへの批判の大合唱が起こっていると言っても過言ではない。このような論調の嵐のなかにおいて、親サイドか、反サイドかの態度を問う踏み絵的な状況が起こっているとも言える。

もちろん、サイドが踏み絵になってしまふのはサイドその人の鋭い舌鋒に起因する側面があることも否定できない。もともと、サイドがフーコーの「知識・権力」論を援用することで言説の政治性が強調されることになり、学問制度としてのディシプリンの政治化が暴露されることに對して容赦のない非難が浴びせられた。学問は客観的でなければならぬという常套句が、現実を事実上動かしていた「権力」の支配構造を隠蔽する機能を果たしてきたからである。それまでアメリカ社会ではユダヤ系知識人が知的特権として独占していた「ペン」という武器をアラブ出身のサイドが携えて、彼らに對抗するかのように登場した。そのために、学的エスタブリッシュメントを形成していたユダヤ系知識人たちの多くから猛烈な反発を招いただけではなく、サイドによ

る言説の政治化の戦略に對して声高にサイド批判を展開するような「ネオ・オリエンタリスト」が登場することになったと言っても過言ではない。このような潮流はある種の知的な反動とも言うべき動向であろう。

サイドがオリエンタリズムの系譜に由来する「東洋学」をある意味では全面的に否定したために、批判の対象となったバーナード・ルイス・プリンストン大学名誉教授をはじめとする伝統的な意味での「オリエンタリスト」がサイド個人を格好の攻撃の標的にしたのである。ちなみに、プリンストン大学はアメリカにおける中東研究の老舗である。というのも、同大学は第二次世界大戦中の一九四四年にレバノン生まれの歴史家でベイルート・アメリカ大学で教鞭をとっていたフィリップ・ヒッティ（一八八六一一九七八年）を東洋言語・文学学科主任に招聘し、冷戦のさなかの一九四七年にアメリカで最初の近東研究プログラムを設立したからである。ヒッティ教授は日本でも『アラブの歴史』（全三巻、講談社学術文庫）の著者としても知られているが、サイドはヒッティをハーバード大学のオリエンタリストとして批判するギブ教授と比較して高く評価して次のように述べている。すなわち、「（ヒッティの属する）プリンストンの学部からは多くの重要な学者が輩出し、その独自のオリエント研究はこの分野に対する多大の学問的関心をひき



おこした。これに対して、ギブはもつと密接にオリエンタリズムの公共政策の側面と関係していたし、彼のハーヴァードにおける地位は、プリンストンのヒッティなどとは比べものにならないほどに、オリエンタリズムを冷戦下の地域研究のアプローチの焦点に据えようとするものであった」(『オリエンタリズム』下：219-219)。

もちろん、サイードの『オリエンタリズム』に対する批判としてアメリカの中東研究における中東出身の研究者の果たす重要な役割に対する言及がほとんどないということもあるが、レバノン出身のヒッティに対して鼻頂目で見ているという批判が出てきそうである。それはともかくとして、サイードを擁護するにしても、彼の議論を金科玉条のごとく扱うのはいかにもサイード的ではない。サイードを「神格化」してしまう姿勢はある種の知的「永久革命論者」であるサイードを語る場合には自家撞着に陥ってしまうからである。ただ、サイードの議論における枝葉末節の危うい表現をあげつらうことで鬼の首を取ったかのような研究者や評論家がわが国でも少なからず存在するのも否定できない事実であることのほうが深刻な事態であろう。オリエンタリストとしてのバーナード・ルイスあるいはサイードとルイスについての論争に関しては別稿で一部は議論し、さらにまとまったかたちで議論する予定なので、そちらに譲りたい(白杵

2003abcd)。

そこで、ルイスより若い世代の代表的なネオ・オリエンタリストの議論について少しばかり考えてみよう。ダニエル・パイプスとマーティン・クレマーである。二人はともにアメリカにおけるシオニスト・ロビーを代表する中東研究者であると断定するとあまりにも一面的な評価になるかもしれない。しかし、現代イスラーム研究における伝統的なオリエンタリスト的な姿勢をあえて強調するアメリカの中東研究者である。二人は非常に分かりやすい単純化されたイスラーム像あるいはアラブ像、換言すればアメリカ社会でステレオタイプ化されて俗受けするイメージを提示してきたのである。二人がこのところ主に活動の場としているのはインターネット上の「キャンパス・ウォッチ」というウェブサイトであり、このサイトを見れば彼らの考え方ややり方が手に取るように見えてくる。このウェブサイトに、学会動向から大卒学人事まで、それこそゴシップ的な情報が満載されており、アメリカの中東研究がいかにも反イスラエル、アラブ寄りで政治的に偏向しているかを訴えることに力を注いでいる。彼らの政治的な主張は明快で、その意味では旗幟鮮明である (<http://www.campus-watch.org/docs/type/inthenews>)。

ダニエル・パイプスによるサイード評価に関しては、

彼はサイドの功績をいったんは評価しつつも、サイドが繰り返し批判している「アラブ自身が自らを代表できない」ことを、先代のオリエンタリストのイスラーム研究の碩学をあえて引用することで、ことさらに強調するのである。すなわち、「残念ながら、ムスリム自身は公的生活の力としてイスラーム研究に相対的にはほとんど何も付け加えてこなかった。(……)」例外もあるが、しかし、ムスリムはたいいてい批判的分析を求める者の助けにならない観点から教義を見ている。H・A・ギブが一九四二年に次のように観察している。すなわち、「西洋の学者がアラブ文化の根源を理解することを可能にするような、いかなる西洋の言語の一つでアラブ人が書いた本は一冊も見ることがない。それ以上に、アラブ文化がアラブ人にとって何を意味するのかを明晰に分析した、アラブ自身のためにアラビア語で書かれた本も一冊も見つたこともない」。五年後、グスタフ・E・フォン・グルネバウムも次のように記している。「(ギブの)この言明を敷衍して非アラブ・ムスリムも含めることができよう。自文化を自分自身だけでなく、西洋に対しても解釈することができなかつた。このことは当時と同様に現在においても当てはまるし、これからも当面は妥当性があるだろう」とパイプスは述べた上で、臆面もなく、次のように断言するのである。「それから三〇年後も状況は根

本的には変化していない」と、アラブのみならず中東イスラーム世界の研究者そのままで槍玉に挙げるのである (Pipes 2003: 25)。

『砂上の象牙の塔——アメリカにおける中東研究の失敗』(Kramer 2001)と題するアメリカにおける中東研究を概観した本を出版したのがマーティン・クレーマーである。クレーマーは中東研究者が発するサイド批判をうまく引用しながらサイド批判を展開しているが、本書については別の機会に批判するつもりであるので、ここでは踏み込まない。しかし、クレーマーは一章をサイド非難に費やしているにもかかわらず、彼のサイド批判のスタイルが不毛なものに感じられるのはサイドのやり方を意図的に真似ながらも、あまりにも俗っぽいやり方で中東学会におけるポリティックスの次元に還元してしまっているからであろう。そのことは次の一節を引用すれば十分であろう。すなわち、『オリエンタリズム』は本棚をひっくり返して乗っ取ったばかりでなく、(大学の)講座までも乗っ取ったのである。それはアラブやムスリムの研究者にとつてのアファーマティブ・アクションのマニフェストになり、アメリカ人(そして輸入されたヨーロッパ人)の研究者にとつて否定的な傾向を作り上げた。(……)サイドはもちろん中東研究をイデオロギー的な勝利の場として提示することを好ん

だ」(Kramer 2001: 39) 云々。

地域研究の出自を問えば、それはアメリカという国家が第二次世界大戦、そして冷戦という二つの「戦場」において形成された政策遂行のための学問領域である。したがって、地域研究の最終的な目的は政策科学としての役割を常に負わされる運命にあった。政策科学としての地域研究は容易に批判の対象となってしまう。なぜなら、政策に従属することは研究者の独立性あるいは研究の自立性を奪うものであるからである。サイドは「知識人とは何か」(Said 1994b)のなかで、批判的精神を欠如させ、体制の擁護者になっている知識人を強く批判している。いわば「野党」的な立場に自らをおくことで批判的精神を貫いた。ただ、そのような批判的な立場では犬の遠吠えのような無責任な役割しか果たせないという批判が聞こえてくる。個々の研究者による他者認識を問うとするならば、このあたりが地域へのコミットメントの仕方のメルクマールになろう。ネオ・オリエンタリストたちの目から見れば、ただたんに批判的な立場から発言する者は無責任で、研究者が果たすべき責務を放棄していると映る。サイドは政治と学問というレベルで深刻な問題を提起したがゆえに、彼の議論は両刃の剣となる。サイドが遺した問いは地域研究にとって依然として重いのである。

## 註

(1) 平凡社版の『オリエンタリズム』はこの ugly neologism という用語を「不体裁な新造語」と少々語感を和らげて訳しているが、平凡社版の件の箇所は以下のとおりである。すなわち、「オリエンタリズムとのかわりに『地域研究』といった不体裁な新造語をみずからすすんで用いることも辞さず、それによつて地域研究とオリエンタリズムとが結局のところは相互置換可能な地理学的呼称にすぎないことを示したのだ」(『オリエンタリズム』上: 127-128)。

(2) 矢野は「発明主義」を「近代主義的思考様式の一類型であり、人間が自らの生存と利害に関係する世界について、恣意的な像化を行う嗜好のこと」であると定義し、これまでの地域研究がこの傾向から免れていないことを指摘する。さらに、自らが研究対象としてかわる地域が、どれほど発明主義的な粉飾をまもっているかを改めて確認する手続きを踏むかどうかは、あらゆる地域研究学者にとって踏み絵のようなものとまで述べている(矢野 1994b: 284, 283)。

## 参考文献

アンワル・アブデル・マレク (1977a) 『民族と革命』熊田亨訳、岩波書店。

—— (1997b) 『社会の弁証法』熊田亨訳、岩波書店。

白杵陽 (2003a) 「バーナード・ルイス・ネオコンの中東政策を支える歴史学者」『イスラム世界はなぜ没落したのか? — 西洋近代と中東』日本評論社、33-42頁。

—— (2003b) 「パレスティンからフィラスティーンへ——方法としての『パレスチナ』再考」『現代思想臨時増刊号 サイド』四四—五三頁。

—— (2003c) 「思想の言葉 ポストコロニアルの知のダイナミズム」

- 『思想』第九五七号、一—三頁。
- (2003d) 「中東イスラーム世界だてのちやんちやんちのちやんちやんち」『季刊マニマ』日本マニマ協会、一〇七号、三〇—三二頁。
- 矢野暢 (1993) 「地域研究とは何か」『講座 現代の地域研究 ① 地域研究の手法』弘文堂、一—二二頁。
- (1994a) 「世界単位とは何か」『講座 現代の地域研究 ② 世界単位論』弘文堂、三—二二三頁。
- (1994b) 「新しい世界観の条件——『発明主義』の超克を求めて」『講座 現代の地域研究 ③ 世界単位論』弘文堂、二八三—三二〇頁。
- Asad, Talal (1973) *Anthropology & the Colonial Encounter*, Humanities Press: Atlantic Highlands, N. J.
- (1993) *Genealogies of Religion: Discipline and Reasons of Power in Christianity and Islam*, The Johns Hopkins University Press: Baltimore and London.
- (2003) *Formation of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*, Stanford University Press: Stanford.
- Kramer, Martin (2001) *Ivory Tower on Sand: The Failure of Middle Eastern Studies in America*, Washington D. C.: The Washington Institute for Near East Policy.
- Pipes, Daniel (2003) *In the Path of God: Islam and Political Power*, New Brunswick and London, Transaction Publishers.
- Said, Edward W. (1978) *Orientalism*, New York: Pantheon Books; London: Routledge & Kegan Paul. (『オリエンタリズム』上下、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライオンブリー、一九九三年)。
- (1979) *The Question of Palestine*, New York: Times Books.
- (1981) *Covering Islam: How the Media and the Experts Determine How We See the Rest of the World*, New York: Pantheon; London: Routledge & Kegan Paul. (『イスラーム報道 増補版』浅井信雄他訳、みすめ書房、二〇〇三年)。
- (1986) *After the Last Sky: Palestinian Lives*, Photographs by Jean Mohr, New York: Pantheon; London: Faber. (『パレスチナとは何か』島弘之訳、岩波書店、一九九五年)。
- (1988) Editor with Christopher Hitchens, *Banning the Victims: Spurious Scholarship and the Palestinian Question*, London: Verso.
- (1993) *Culture and Imperialism*, New York: Knopf/Random House. (『文化と帝国主義』大橋洋一訳、みすめ書房、一九九八年、II二〇〇一年)。
- (1994a) *The Politics of Dispossession: The Struggle for Palestinian Self-Determination, 1969-1994*, New York: Pantheon Books.
- (1994b) *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures*, New York: Pantheon Books. (『知識人とは何か』大橋洋一訳、平凡社、一九九五年)。
- (1995) *Peace and Its Discontents: Essays on Palestine in the Middle East Peace Process*, Preface by Christopher Hitchens, New York: Vintage, 1995. Published in Britain as *Peace and Its Discontents: Gaza-Jericho, 1993-1995*, London: Vintage.
- (1999) *Out of Place: A Memoir*, New York: Knopf. (『異な場所の記憶 追記』中野真紀子訳、みすめ書房、二〇〇一年)。
- (2000) *The End of the Peace Process: Oslo and After*, New York: Pantheon Books; London: Granta, 2000.
- (みすめあきら／地域研究企画交流センター)